

## マ ガレット マルカス 米国出身の元ユダヤ教徒 (1/5)

:

明:マ ガレットは、幼少期に通った日曜学校について、また全ての宗教 体を蔑 するようになった について、そして大学で取ったユダヤ教とイスラ ムのクラスについて ります。

目: [事新改宗者ムスリムの逸 女性](#)

より: マ ガレット マルカス

日 1 Apr 2014

集日 21 Apr 2014

Q:どのようにしてイスラ ムに 味を持ち始めたのか教えてください

A:



私はマ ガレット (ペギ ) マルカスとして生まれました。幼少期から、私は音 への い 心を持ち、西 社会において洗 された文化と なされるクラシック オペラや交 曲が特に好きでした。学校では音 のクラスが好きで、常に最も良い成 を めていました。全くの偶然からラジオで耳にしたアラビア音 をひどく に入り、もっと きたいと思うようになりました。私は にせがんでニュ ヨ クのシリア人街に れていってもらい、アラビア音 のレコドをまとめ いしました。私の 、 戚、 人たちは皆、アラビア とその音 は酷く奇妙で耳障りであると感じ、私がレコドをかけると、彼らはそれが迷惑だと言い、私の部屋のドアと を め切るよう要求しました。私は1961年にイスラ ムに改宗した 、有名なエジプト

人の朗家アブドル＝バスイトのティラワ（クルアーン朗）をくためにニューヨークのモスクに行き、そこで魅了されたまま何でも座りけることが出来ました。サラトル＝ジウムア（金曜合同礼）では、イマムはテープを再生しませんでした。その日、特ゲストが来たのです。ザンジバル出身の学生であると自己紹介した彼は、背が低く非常にせ、粗末な衣服を来た人の少年で、スラトツ＝ラフマン（クルアーンの一章）を朗しました。私はあれ程までに事なティラワを、アブドル＝バスイトからでさえいたことがありませんでした。彼は黄金の声を持っていました。言者の教友で、一日5回の礼の呼びかけを任せられていたビラル（彼に神のご悦あれ）は、おそらく彼のような声だったことでしょう。

私のイスラムへの心は、10にまでさかのぼります。ユダヤ教改革派の日曜学校に通っていた私は、ユダヤ人とアラブ人の史的に味を抱きました。ユダヤ教の教科で、アブラハムはアラブ人とユダヤ人双方の父祖であることを知りました。また、その数世の中世ヨーロッパにおいて、キリスト教徒による迫害に耐えられなくなった彼らはムスリムスペインで迎えられましたが、このアラブイスラム文明の大きさにより、ヘブライ文化の功がピクにするきっかけとなったのです。

シオニズムの真の性に着だった私は、ユダヤ人がパレスチナにすれば、一神教の「兄弟」との地域の密接な結び付きを化すものだと思い込んでいました。ユダヤ人とアラブ人は束し、中における文化の新たな黄金代をき上げるのだと信じていました。

ユダヤ教の史への心とはよそに、私は日曜学校を非常に嫌していました。当の私は、自身をナチスによる迫害を受けたヨーロッパのユダヤ教徒と同一しており、クラスメイトたちやそのたちが一人として宗教を真に受け止めていなかったことにを受けていました。シナゴグでの集会で、子供たちは祈祷に漫画本を忍びませたり、式を笑いばしたりしていました。乱暴でがしい子供たちは教たちの手にえず、クラスの行も非常に困なものでした。

家庭内においても、宗教の践はほとんど成立していませんでした。私の日は日曜学校を嫌うあまり、母は文字通り彼女をベッドから引きずり出さねばならず、と激しい言の

酬きには家を出ることはありませんでした。最終的に、は音を上げて彼女が辞めることをさざるを得ませんでした。ユダヤ教の祭日では、シナゴグに行ったりヨムキプルの断食をする代わりに、私たちは学校を休んで家族ピクニックに行ったり、高レストランのパーティに参加したりするようになりました。というのも私とが、日曜学校がいかに酷く、私たちが悲惨な思いをしているかをに得ると、はEthical Culture Movement（理的文化ムーブメント）という不可知者の人道体に加わったのです。

## Ethical Culture

Movementはフェリックスアルダが19世末にした体です。ユダヤ教の神学を学んでいたフェリックスアルダは、理的なへの献身こそが人的かつ意ある、代世界に相しいものであることを信じ、性や神学は意味であると主しました。私がEthical Cultureの日曜学校に11のときから通い始め、15で卒業するには、彼らの理念に完全に同じ、すべての的的宗教を蔑するようになっていました。

私は18のとき、「ミツラチハツェル」と呼ばれる地元の青年シオニズムのメンバーになりました。しかし、ユダヤ人とアラブ人のの意を煽るシオニズムの性について知った私は、それに嫌をさし、数カ月に脱会しました。ニューヨーク大学の生徒だった20のは、科目の一つに「ユダヤ教におけるイスラム」というクラスがありました。教授のラビアブラハムイサクカッチは、イスラムはユダヤ教から分派したものであるというユダヤ教の点を生徒に得しようともみませんでした。生徒たちは皆ユダヤ教徒で、彼らの多くはラビになることを目としていました。そこで用いられた教科は彼自身の著で、クルアンの々を入念に辿り、それらがユダヤ教に依るものであるというを展しました。彼の真の目的は、ユダヤ教の越性を生徒たちに明することでしたが、それは私にとっては全くの逆果でした。

私はシオニズムが、ユダヤ教における人差主部族主的な面のみ合わせにぎないものであることにが付きましました。シオニズムの指者たちに践的なユダヤ教徒が全くと言っていい程いないことを知った私の目に、近代の世俗国家主的シオニズムの信用はさらに失しました。イスラエルにおいてほど、正派派ユダヤ教が烈な蔑みの象となっている所は他にないのです。ほぼすべてのユダヤ教指者たちがシオニズムの支持者であり、

パレスチナのアラブ人たちに する酷い不正に して良心の呵 を少しも感じていないことを知った私は、心中では自分のことをユダヤ教徒であると なすことが出来なくなっていました。

1954年のある朝、カツ教授は授 中に、モ ゼ（神の慈悲と祝福あれ）によって かれた一神教と、彼に 示された神の律法は、すべての高度な 理的 における基 として欠かせないものであることを、反 不可能なロジックによって提示しました。Ethical Cultureや不可知 者、神 者たちが主 するように、もしも 理が真に人 的なものであるのなら、それは思いつき、便宜、状 に基づいて思い通りに えてしまうことが出来るはずで ず。その 果、社会は混乱に り、破 してしまうでしょう。ラビの教えるタルム ドにおける来世への信仰は、なる 望的思考ではなく、 理的な必然性であるとカツ教授は じました。彼は、私たちのすべてが 判の日、世での行いを清算されるため、そしてそれに じて または を受けるために神によって召集されるということを 信する者たちだけが、い欲望を 牲にし、不 の善を手に入れるため困 を耐え得る自己修 を有しているのだと述べました。

この 事のウェブアドレス:

<https://www.islamreligion.com/index.php/jp/articles/118>

著作 2006-2015 断 を禁じます。 2006 - 2023 IslamReligion.com. 断 を禁じます。